

芽ぐむ森

一天竜区における森林教育の場の提案—

Keywords

森林教育 中山間地域 林業
地域交流



DZ17186 小俣 翔

1. はじめに

日本は、国土の約2/3の森林面積があり、気候や豊かな土壌などの条件がそろっているため、森林大国と呼ばれている。

その一方で、林業や木材生産などに関する知識は十分に浸透しておらず、林業を目指す若者は減少し、森林大国と呼ばれていながら、林業という産業は衰退している現状にある。

2. 研究背景

2.1 日本人の森林に対する意識

日本では森林と生活圏の乖離などの理由から、森は非日常の存在であるため、森を遊び場としてとらえている子供も少なく、森林ボランティアなどの活動への参加意欲のある人も少数である。森林好きな国民性を持つドイツでは、林業という仕事は「子供たちの憧れの職業」であり、木材生産量も日本の約3倍となっていることから、森林への意識の差がうかがえる。

それにより、「間伐は森林破壊につながる」、「木材は火に弱い」などの森林・林業・木材に関する誤認識が浸透しており、林業従事者の減少などの問題に影響が及んでいる。

表1. 日独の子供への自然環境に関するアンケート（最も多かった回答とその割合）

	自然が多い場所	森に行く頻度
ドイツ	森 (67%)	週 1~2 回 (44%)
日本	森 (57%)	行かない (59%)

※出典：ドイツと日本における子どもたちの森林に対するイメージ比屋根哲（岩手大農）・大石康彦（森林総研東北）・寺下太郎（愛媛大農）・井上真理子（森林総研）

2.2 日本の森林教育の現状

森林教育のフィールドは、小学校での出張講義や、林業大学校などの利用者が限定的な場所や、森林で行われることが多く、多数の人が触れる機会は少ない。また、その内容も発達段階を考慮されたものは少なく、内容に限定された短期的なものであるため、効果的とはいえない。

3. 研究目的

地域住民の身近に、発達段階に合った森林教育の場を設けることで、それぞれの森林に対する意識を高める。

それと同時に、地場産材を活用することで、地域の林業を再興させるきっかけを作る。

4. 対象敷地

4.1 敷地概要

浜松市天竜区は、天竜川の治水をきっかけに林業が発展した町である。その森林は、現在は日本三大人工美林の一つとして数えられ、良質な木材が生産される。

近年は過疎化・高齢化の進行や、それに伴って、商店街の衰退やデパートの閉店など、街の交流拠点がなくなり、地域交流が減少している。

同時に、天竜区外の様々なベンチャー企業が「天竜トリアルオフィス」等を中心に活動を始めたことで子育て世代が増加しつつあり、人口構成に新たな動きがみられる。



図1. 敷地周辺 (Google Earth)

4.2 敷地分析

(1)天竜の森の入り口

天竜二俣町は、天竜の森と浜松市街地の中間に位置し、天竜の森の入り口といえる場所である。計画敷地周辺には、天竜二俣高校やすぎのこ幼稚園、天竜区役所などの多世代が集まる施設が点在している。

このエリアに、幅広い世代の地域住民や来訪者が集まる地域の交流拠点を作りたいと考えた。

(2) 天竜地区における林業事業体

天竜区では、「天竜林業研究会」をはじめとした、天竜区の林業従事者による団体が多く存在する。それらの団体が地域住民を巻き込んで森林体験活動を行うことによって、森林や林業について学ぶ機会を設けている。

しかし、そういった活動への参加者は限定的であるため、今後より多くの地域住民が森に触れる機会が増える事が必要である。

5. 計画概要

敷地面積：3,672㎡、延床面積：2,318.4㎡、
建築面積：1,393.4㎡

5.1 建築プログラム

- ・図書コーナー 380㎡
 - ・図書コーナー ・読書スペース ・閉架書庫
- ・森林教育プログラム 640㎡
 - ・森林教室・森林ギャラリー・多目的ホール・ワークショップスペース・ギャラリー・木工房
- ・レストラン 133㎡
- ・ワークショップスペース 64㎡
- ・林業グループ事務所 90㎡
- ・スタジオ 105㎡
- ・会議室 43.5㎡
- ・自習スペース 48㎡
- ・遊戯スペース 184㎡

5.2 設計趣旨

「天竜トライアルオフィス」をはじめとしたサテライトオフィス等による移住者など、今後の人口構成の変化に対応するために、地域の住民が日常的に利用する市民交流の場と森林教育施設の複合施設を計画する。

教育プログラムは、発達段階に合わせて、年齢ごとの森林教育プログラムを用いて、天竜林業研究会が主体として行う。

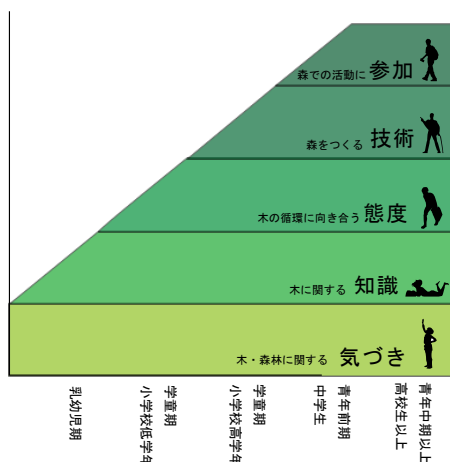


図2. 発達段階ごとの森林環境教育の目標

参照：「発達段階に応じた森林環境教育の実施の必要性」
杉浦克明より

5.3 設計手法

(1) ダイアグラム

発達段階ごとの目標に合わせた森林環境プログラムを配置し、壁柱によって空間を緩やかに分断すると同時に、プログラムに応じた様々なアクティビティを誘発する。

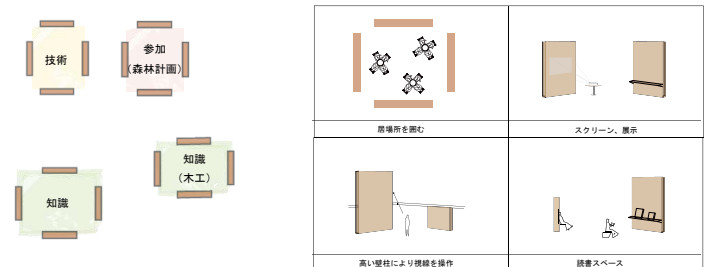


図3. 壁柱の配置、アクティビティ

(2) 配置計画

壁柱を森に生える木々の様に配置し、森と同化しながら学び、活動する場をつくっていく。

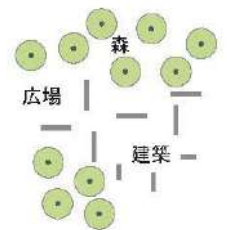


図4. 配置計画

6. おわりに

木質化、木材利用により、持続可能な社会実現へ貢献するためにも、林業体制が整えられ、木材生産量を増加させることが、森林資源を多く持つ日本の役割である。

この建築が、子供たちに、森林、林業に興味をもつきっかけを与えることを期待する。

7. 参考文献

- (1)「浜松市森林・林業ビジョン」
平成19年度 浜松市農林産部森林課
- (2)「ドイツと日本における子どもたちの森林に対するイメージ選択形式によるアンケート調査から」 比屋根哲（岩手大農）・大石康彦（森林総研東北）・寺下太郎（愛媛大農）・井上真理子（森林総研）
- (3)「ドイツから見た日本の森林・林業の課題—2008年「森林組合トップセミナー」・「ドイツの元森林官との意見交換会」の講演録—」 (株)農林中金総合研究所 基礎研究部
- (4)「ドイツとの比較分析による日本林業・木材産業再生論」
富士通総研（FRI）経済研究所 主任研究員 梶山恵司
- (5)「平成27年度 林業グループ活動・研究事例集」
フォレスターネット
- (6)「発達段階に応じた森林環境教育の実施の必要性」
杉浦克明



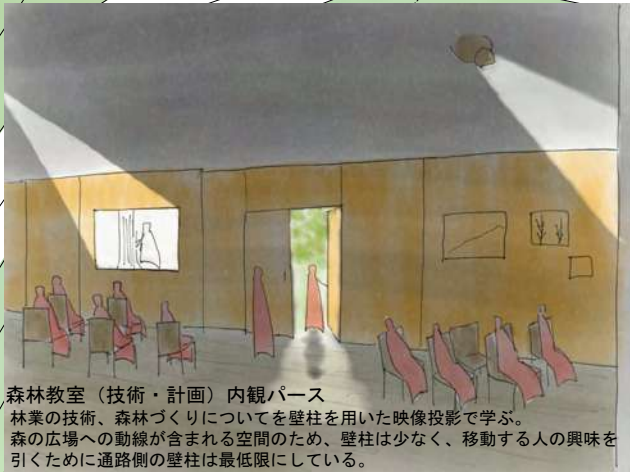
森の広場 外観パース

ストックヤードなどの林業技術体験の場と、市民の憩いの場となる森の広場を壁柱によって分けることで、空間は緩やかに分けながら、それぞれの場所からの視線が通るように操作する。



子ども広場 外観パース

壁柱を配置することで、子どもたちが遊ぶ空間を森の近くに生み出す。さらに壁柱で作り出した道が遊歩道の入り口に繋がり、森へと動線を促す。



森林教室（技術・計画）内観パース

林業の技術、森林づくりについてを壁柱を用いた映像投影で学ぶ。森の広場への動線が含まれる空間のため、壁柱は少なく、移動する人の興味を引くために通路側の壁柱は最低限にしている。



ワークスペース 内観パース

天竜林業研究会と地域住民の交流を促すフリーアドレスのワークスペース。四方を壁柱で囲み、人々の滞在を促す。



森林ギャラリー 内観パース

森林に関する知識を浸透させるために、壁柱を用いた映像投影、展示をする。吹き抜けを貫く大きな壁柱は上階への視線誘導の効果も持つ。

